学生の授業のねらいの理解度と学習到達度

—保育内容「人的環境・物的環境」—

岡田　真智子，伊藤　照美
愛知学泉短期大学

Students' understanding and learning achievement levels on goals of class

- Nursing content "Human environment・Physical environment" -

Machiko Okada　Terumi Ito

キーワード：保育内容　nursing content，物的関係　physical relationship，人間関係　human relationship，学習到達度　learning achievement level，理解　understanding level

1. 緒言

保育の目的として，「文部科学省学校教育法第 22 条「幼稚園は，義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして，幼児を保育し，幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて，その心身の発達を助長することを目的とする[1)]」とし，保育士を目指す学生への教育には幼児期にあった生活ができることや遊びを通して，子どもたちへの保育や，一人ひとりの特性に合わせた保育ができるようにすることを教育の中で育てなくてはならない。その中で，環境には人的環境，物的環境，自然環境，社会的環境が考えられる。子どもが遊びのきっかけとなる環境には２つの環境が考えられる。まず１つ目は，人的環境である。人的環境とは，子どもや保育者，親兄弟，近隣の人々など，それらが影響する人間関係と関わることで子どもの成長に援助していくことである。2 つ目は物的環境である。物的環境とは物理的な事象や建物，自然物など，子どもたちがのびのびと生活ができる豊かな環境をつくってあげることである。

保育所保育指針の第１章総則には「保育を必要とする子どもの保育を行い，その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童養護施設」であることを明確にし，環境を通して養護及び教育を一体的に行う。[2)]」特に平成３０年の改定では乳幼児，１歳以上３歳未満児の保育に関する記載が充実し，この時期の子どもが，生活や遊びのさまざまな場面で主体的に周囲の人や物に興味を持ち，直接かかわっていこうとする姿は「学びの芽生え」と言えるものであり，一生続く学びの出発点となるものであり，非認知能力を育てるために養護的働きかけ養護的環境作りの大切さが強調された。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第１章総則第１において,「認定こども園法第２条第７項に規定する目的及び第９条に掲げる目標を達成するため乳幼児期全体を通して，その特性および保護者や地域の実態を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とし，家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない。そのため，保育教諭等は園児との信頼関係を十分に築き，園児が自ら安心して身近な環境に主体的にかかわり，環境とのかかわり方や意味に気づき，これらを取り込もうとして，試行錯誤したり，考えたりするようになる王子忌の教育における見方考え方を生かし，その活動が豊かになるよう環境を

整え園児と共によりよい教育及び保育環境を創造するよう努めるものとする[3]」と示されている。

本学ではこの環境の授業内容として，1 時間の中で講義と演習の取り組みを実施している。講義では，子どもの成長発達にとってどのような環境が良いのか，また，子どもを取りまく身近な環境（自然・社会・遊び・文化）などについて理解させること。そして，望ましい環境の構成はどのようにすれば良いかなど，環境の基礎に置いた学修内容を行っている。演習では，体験学習として，野菜や花の栽培，自然観察などの具体的な体験を通し「環境」を理解し，生命の大切さや尊さに気づき，保育者として幼児に伝える方法を身につけさせる。また，専門的知識・技能を習得し，それぞれの現場で協調性をもって柔軟に活用できることを目標として行っている。本研究では，学生自身が環境の授業を理解し，主体的に取り組めているか，また，自己評価を用いて学生の学習到達度を明らかにするとともに様々な不安や課題を解消することと今後の授業改善につながる授業評価の在り方について検討することを目的とした。

（1）学修内容と目標とねらい

①保育における環境とは何を指すのか理解する

②幼稚園教育要領，保育所保育指針における領域環境のねらいと内容を理解する

③野菜や花の栽培や自然観察を通し実践力を身につける

④子どもを取りまく身近な環境と保育内容の環境との関連性を理解する

⑤安全教育，近隣社会との関連を具体的に理解する

（2）授業の展開

短期大学

授業は 1 年生の前期「保育内容　環境」であり，平成 29 年度は 106 名が受講した。講義と演習を行っているため，2 人の教員が授業を進めている。授業の展開は以下の通りである。（表 1）

表 1

回数	内容	
	講義	作業
1	オリエンテーション（授業の進め方、作業の服装、栽培日誌について）	畑の見学 植物とのかかわり（散歩） ＊歩きやすい靴を用意する
2	保育と環境 （栽培日誌を持参する）	野菜畑の石拾い・畝作り・施肥・マルチシートかけ
3	環境の構成	作業の見通し・花・野菜調査 〈パワーポイント説明〉
4	領域「環境」のとらえ方	野菜苗の植え付け
5	保育環境の構成 （水やり当番の説明）	観察・除草 野菜畑の支柱たて
6	遊びと環境構成	観察・除草
7	人的環境・物的環境	観察・除草
8	環境をデザイン 栽培日誌提出（中間）	観察・除草・収穫
9	生き物とのかかわり	観察・除草・収穫
10	安全教育	観察・除草・収穫
11	社会の文化（社会的環境）	観察・除草・収穫
12	生活と遊び	観察・除草・収穫
13	生活と繋がる文字や数量	観察・除草・収穫
14	地域環境	観察・除草・収穫
15	近隣社会との連携 レポート作成 栽培日誌提出	観察・除草・除草
注意点	＊毎回作業があります。ふさわしい服装を用意する	

①子どもとの関わりでは，近隣の園児さんと芋の苗植えを行う（5 月初旬）

②子どもとの関わりでは，附属幼稚園の園児さんと芋掘りを行う（9 月中旬）

(3) 作業風景

図 1. 夏の花壇をイメージした花の苗

図 4. 夏野菜の収穫

図 2. 夏野菜と花とコラボした花壇

図 5. バケツ一杯のトマト収穫

図 3. マリーゴールド他

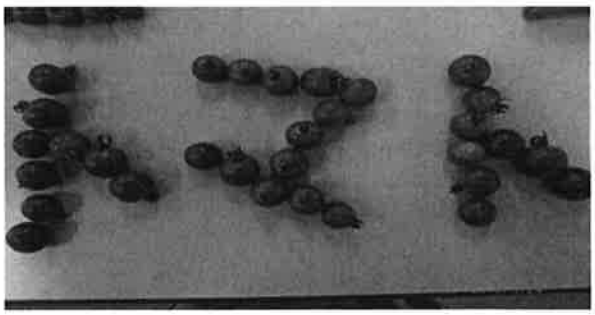

図 6. 収穫したトマト（文字を意識）

図 7. 収穫したピーマン（大小を意識）

図 8. サツマイモの苗が着床するまで水やり

図 11. 園児の到着

図 9. 芋ほりの準備

図 12. 園児と並んであいさつ

図 10. マルチや弦を刈り取って芋ほり準備完了

図 13. 芋ほりの説明を聞く

図 14. 芋を掘る前の状態

図 17. 子どもへの助言と芋ほり体験

図 15. 学生のリードで実施

図 18. 芋ほり体験①

図 16. 注意事項を園児と聞く

図 19. 芋ほり体験②

図 20. 芋の収穫①

図 21. 芋の収穫②

図 22. 芋ほり体験終了

(4) お花と野菜ノート（参考資料）

図 1. ノート表紙

図 2. ノート裏表紙

図 3. ノート表紙

図 4. ノート裏表紙

図 5. ノート表紙

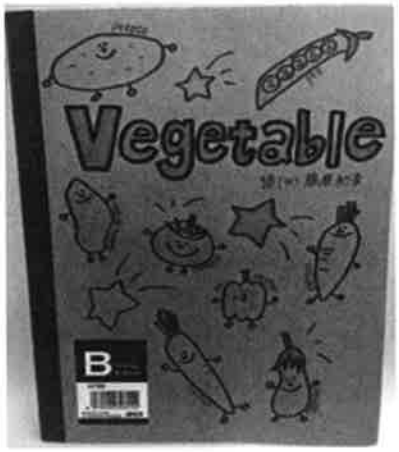

図 6. ノート

図 7. 観察日誌

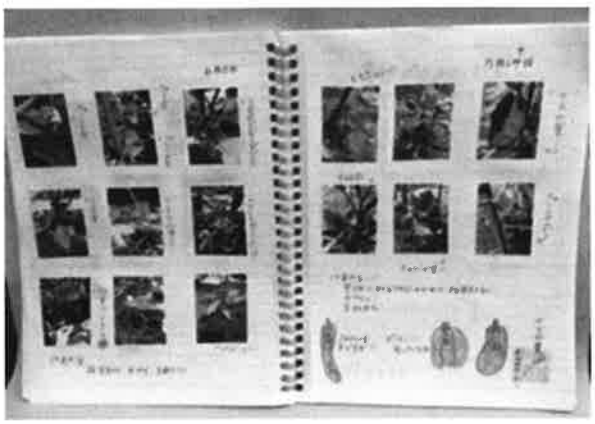

図 8. 観察日誌

図 9. 観察日誌

図 10. 観察日誌

図 11. 観察日誌

2. 方法

(1) 調査期間

平成 30 年 4 月

(2) 調査対象

女子短期大学　幼児教育学科　2 年生 98（必修科目）データの記入漏れなどは変数ごとに欠損値として扱った。

3. 調査内容

(1) 授業全般の理解度について

授業全般の理解度について 11 項目の質問を作成し５件法を用いて得点化した。

(2) 授業内容の理解度について

授業内容の理解度について 10 項目の質問を作成し５件法を用いて得点化した。

(3) 自己評価について

自己評価について 7 項目の質問を作成し 5 件法を用いて得点化した。

(4) 自由記述として

「この授業を受けてよかったところ」「この授業を受けて悪かったところ」を記述してもらった。

(5) 分析方法

質問項目に対して，「当てはまらない」を 1 点，「やや当てはまらない」を 2 点，「どちらでもない」を 3 点，「やや当てはまる」を 4 点，「当てはまる」を 5 点として各質問項目の得点を算出した。

質問項目は以下のとおりである。（表 1）（表 2）

表 1. 質問項目
授業全般と授業内容のねらいと理解度について

	質問項目	①当てはまらない	②やや当てはまらない	③どちらでもない	④やや当てはまる	⑤当てはまる
【授業全般】						
1	授業の内容はわかりやすかった					
2	授業の内容に対して時間配分は適切だった					
3	授業の進み方は、早すぎることも遅すぎることもなかった					
4	授業時間がむやみに延長、短縮することはなかった					
5	授業の進行を理解するのにグループワークの学習体制は適切だった					
6	グループで野菜や植物を育てる活動は良かった					
7	グループ活動では十分話し合いながら進められた					
8	授業内容は興味の持てるものであった					
9	授業内容は将来、現場で役立つものであった					
10	授業に積極的に関わることができた					
11	授業へ取り組む環境は適切だった					
12	教員の指導、アドバイス、助言のタイミングはよかった					
13	教員は学生の主体性を尊重していた					

表 2. 質問項目
ねらいと内容の理解度について

	質問項目	①当てはまらない	②やや当てはまらない	③どちらでもない	④やや当てはまる	⑤当てはまる
【ねらいと内容】						
14	授業を通して環境を身近に感じ親しみを得ることができた(内容)					
15	自然について学ぶ中で自然の現象(出来事)に興味や関心をもてた(内容)					
16	身近な環境に自分から関わろうと思った(内容)					
17	身近な環境を発見し、楽しむことができるようになった(内容)					
18	自然に対して美しさや不思議さに気づくことができた(ねらい)					
19	季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づいた(ねらい)					
20	身近な動植物に興味をもつようになった(ねらい)					
21	身近なものを大切にするようになった(ねらい)					
22	生活に関係の深い情報や施設などに関心や興味をもつようになった(ねらい)					
23	野菜や花の栽培や自然観察を通し、実践力が身に付いた					
24	子どもにとって望ましい環境構成が理解できた					

4. 授業内容全般アンケートの実施結果と考察

表 1. 授業内容はわかりやすかった

授業の内容はわかりやすかった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	18	18.4	18.4	18.4
	4	39	39.8	39.8	58.2
	5	41	41.8	41.8	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業内容のわかりやすさ』について，「やや当てはまる」が 39.8%，「あてはまる」が 41.8%でほぼ同じ割合であった。この結果から，授業の内容についての説明は，学生にとってわかりやすい授業内容であることが考えられる。

表 2. 授業の内容について時間配分は適切だった

授業の内容に対して時間配分は適切だった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	2	2.0	2.0	2.0
	2	9	9.2	9.2	11.2
	3	23	23.5	23.5	34.7
	4	41	41.8	41.8	76.5
	5	23	23.5	23.5	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『時間配分に対して適切だった』について，「どちらでもない」が 23.5%，「やや当てはまる」が 41.8%，「当てはまる」が 23.5%であった。この結果から，その時間の活動内容によっては外での演習時間が長引くことで，講義の時間がずれてしまうことが考えられる。

表 3. 授業の進み方は，早すぎることもなく遅すぎることもなかった

授業の進み方は、早すぎることも遅すぎることもなかった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	1	1.0	1.0	1.0
	2	3	3.1	3.1	4.1
	3	28	28.6	28.6	32.7
	4	41	41.8	41.8	74.5
	5	25	25.5	25.5	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業の進み方は，早すぎることも遅すぎることもなかった』について，「どちらでもない」が 28.6%，「やや当てはまる」が 41.8%，「当てはまる」が 25.5%であった。この結果から，授業の進め方のバランスは悪くはなかったことが考えられる。

表 4. 授業時間がむやみに延長，短縮することはなかった

授業時間がむやみに延長、短縮することはなかった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	2	2.0	2.0	2.0
	2	11	11.2	11.2	13.3
	3	25	25.5	25.5	38.8
	4	40	40.8	40.8	79.6
	5	20	20.4	20.4	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業時間がむやみに延長，短縮することはなかった』について，「やや当てはまらない」が 11.2%，「どちらでもない」が 25.5%，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 20.4%であった。この結果から，「やや当てはまる」と「当てはまる」の合計が 61.2%から，授業の終わりについては概ね時間通りに終了していた結果と考えられる。

表 5. 授業の進行を理解するのにグループワークの学習体制は適切だった

授業の進行を理解するのにグループワークの学習体制は適切だった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	2	2.0	2.0	2.0
	3	29	29.6	29.6	31.6
	4	40	40.8	40.8	72.4
	5	27	27.6	27.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業の進行を理解するのにグループワークの学習体制は適切だった』について，「どちらでもない」が 29.6%，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 27.6%であった。この結果から，グループワークを通して，学習することが学生にとって，理解度を高めることへ効果的であることが考えられる。

表 6.　グループで野菜や植物を育てる活動は良かった

グループで野菜や植物を育てる活動は良かった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	14	14.3	14.3	15.3
	4	24	24.5	24.5	39.8
	5	59	60.2	60.2	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『グループで野菜や植物を育てる活動は良かった』について，「どちらでもない」が 14.3%，「やや当てはまる」が 24.5%，「当てはまる」が 60.2%であった。この結果から，グループ活動を通して野菜や花を育てることが仲間との協力しようとする力が養われたと思われる。また，「やや当てはまらない」が 1.0%あったことは集団での活動が苦手と感じる学生や，自分を表現できない事への自分自身への不満があった学生がいることも考えられる。

表 7.　グループ活動では十分話し合いながら進められた

グループ活動では十分話し合いながら進められた					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	5	5.1	5.1	5.1
	3	25	25.5	25.5	30.6
	4	40	40.8	40.8	71.4
	5	28	28.6	28.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『グループ活動では十分話し合いながら進められた』について，「どちらでもない」が 25.5%，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 28.6%であった。この結果から，グループ活動で大切な，意見を述べることや傾聴において学生たちがチーム力を身につけることができたと考えられる。

表 8.　授業内容は興味の持てるものであった

授業内容は興味の持てるものであった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	2	2.0	2.0	2.0
	3	23	23.5	23.5	25.5
	4	40	40.8	40.8	66.3
	5	33	33.7	33.7	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業内容は興味の持てるものであった』について，「どちらでもない」が 23.5%，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 33.7%であった。この結果から，環境の授業は学生にとって保育の現場で必要な活動であることが理解でき，関心を持てるものであったことが考えられる。

表 9.　授業内容は将来，現場で役立つものであった

授業内容は将来、現場で役立つものであった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	19	19.4	19.4	20.4
	4	39	39.8	39.8	60.2
	5	39	39.8	39.8	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業内容は将来，現場で役に立つものであった』について，「どちらでもない」が 19.4%，「やや当てはまる」が 39.8%，「当てはまる」が 39.8%であった。この結果から，養成校を 2 年で終わり，卒業後すぐに保育の現場に出ることから，授業の内容が実践できることが保育実習Ⅱでの実習先で野菜や花を育て保育現場で役立つことが考えられる。

表 10.　授業に積極的に関わることができた

授業へ積極的に関わることができた		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	17	17.3	17.3	18.4
	4	40	40.8	40.8	59.2
	5	40	40.8	40.8	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業へ積極的に関わることができた』について，「どちらでもない」が 17.3%，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 40.8%であった。この結果から，欲的に授業へ取り組むことができていることが考えられる。

表 11.　授業へ取り組む環境は適切だった

授業へ取り組む環境は適切だった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	4	4.1	4.1	4.1
	3	13	13.3	13.3	17.3
	4	49	50.0	50.0	67.3
	5	32	32.7	32.7	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業へ取り組む環境は適切だった』について，「やや当てはまる」が 50%，「当てはまる」が 32.7 5であった。学生が取り組む環境づくりについては問題がなかったと考えられる。

表 12.　教員の指導，アドバイス，助言のタイミングは良かった

教員の指導、アドバイス、助言のタイミングは良かった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	19	19.4	19.4	19.4
	4	44	44.9	44.9	64.3
	5	35	35.7	35.7	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『教員の指導，アドバイス，助言のタイミングは良かった』について，「どちらでもない」が 19.4%，「やや当てはまる」が 44.9%，「当てはまる」が 35.7%であった。この結果から，学生が必要とする，質問や疑問に関しての対応が良かったことが考えられる。

表 13.　教員は学生の主体性を尊重していた

教員は学生の主体性を尊重していた		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	20	20.4	20.4	20.4
	4	50	51.0	51.0	71.4
	5	28	28.6	28.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『教員は学生の主体性を尊重していた』について，「どちらでもない」が 20.4%，「やや当てはまる」が 51.0%，「当てはまる」が 28.6%であった。この結果から，教員から問いかけることではなく，自発的に取り組むことができていることが考えられる。

5. 授業全般についての理解度と今後の課題

以上の結果から「保育内容　環境」の授業全般の取り組みとして主体的に参加し，積極的に取り組むことができたと考えられる。保育者を目指す学生にとって，これから出会う園児の保育・教育に実際携わる学生が主体的に，積極的に授業に参加する体験は，立場を変え，子どもに対してどのようにかわるのかを，体験を通して学ぶことにつながると考えられる。授業の環境は園児指導の環境構成と関連付けを考えることにつながり，グループワークを通して，チームワークの取り方，互いに伝え合い互いに理解し作業に取り組む中で，人的環境の大切さを学んでいくことが実践を通して学ぶことができたと考える。

環境による教育を体験することは「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が義務づけられたことによって，実践での取り組みが非常に重要となることから，子ども自ら主体的に取り組める環境の中で，自己を発揮し，互いに思考を巡らせともに考え，自己課題を解決していくアクティブラーニングが重要になったことにもつながりが見られる。しかし，教員が，グループワークの苦手な学生，学びの個人差などの課題が残り，子どもの良き人的環境として大きな意味をもつ保育者として，どうあるべきかを意識した学びにより，教育していく上で助言が必要であると言える。

6. 授業内容のねらいと理解度のアンケートの実施結果と考察

表1. 授業を通して環境を身近に感じ親しみを得ることができた（内容とねらい）

授業を通して環境を身近に感じ親しみを得ることができた		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	16	16.3	16.3	16.3
	4	41	41.8	41.8	58.2
	5	41	41.8	41.8	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『授業を通して環境を身近に感じ親しみを得ることができた』について，「やや当てはまる」が 41.8%，「当てはまる」が 41.8%であった。この結果から，普段から身近な環境にはあまり興味がなかったと思われるが，授業を通して，身近な環境を知ることにより，意識するようになったことが考えられる。

表 2. 自然について学ぶ中で自然の現象（出来事）に興味や関心が持てた（内容

自然について学ぶ中で自然の現象に興味や関心をもてた		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	21	21.4	21.4	21.4
	4	49	50.0	50.0	71.4
	5	28	28.6	28.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『自然について学ぶ中で自然の現象（出来事）に興味や関心が持てた』について，「やや当てはまる」が 50%，「当てはまる」が 28.6%であった。この結果から，自然の中の現象の理解ができたことと，それに対して，好奇心や意識が向くようになったことが考えられる。

表 3. 身近な環境に自分から関わろうと思った（内容）

身近な環境に自分から関わろうと思った		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	34	34.7	34.7	35.7
	4	41	41.8	41.8	77.6
	5	22	22.4	22.4	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『身近な環境に自分から関わろうと思った』について，「どちらでもない」が 34.7%，「やや当てはまる」が 41.8%，「当てはまる」が 22.4%であった。この結果から，身近な環境を理解したことで，環境について知りたいと思う気持ちが強くなってきたことが考えられる。

表 4. 身近な環境を発見し，楽しむことができるようになった（内容）

身近な環境を発見し、楽しむことができるようになった		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	19	19.4	19.4	20.4
	4	49	50.0	50.0	70.4
	5	29	29.6	29.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『身近な環境を発見し，楽しむことができるようになった』について，「やや当てはまる」が 50%，「当てはまる」が 29.6%であった。この結果から，環境を発見することで，環境の面白さを知ることができたと考えられる。

表5. 自然に対して美しさや不思議さに気づくことができた（ねらい）

自然に対して美しさや不思議さに気づくことができた		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	29	29.6	29.9	30.9
	4	45	45.9	46.4	77.3
	5	22	22.4	22.7	100.0
	合計	97	99.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	1.0		
合計		98	100.0		

『自然に対して美しさや不思議さに気づくことができた』について，「やや当てはまる」が 46.4%，「当てはまる」が 22.7%であった。この結果から，自然に対する現象が，普通と違う姿形に気づくことで，興味を持てるようになったことが考えられる。

表6. 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づいた（ねらい）

季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づいた					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	25	25.5	25.5	25.5
	4	49	50.0	50.0	75.5
	5	24	24.5	24.5	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づいた』について，「やや当てはまる」が 50%，「当てはまる」が 24.5%であった。この結果から，季節によって自然の変化は知っているが，自然の変化と人間の関係について知らなかったことが考えられる。

表7. 身近な動植物に興味をもつようになった（ねらい）

身近な動植物に興味をもつようになった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	3	26	26.5	26.5	26.5
	4	45	45.9	45.9	72.4
	5	27	27.6	27.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『身近な動植物に興味をもつようになった』について，「やや当てはまる」が 45.9%，「当てはまる」が 27.6%であった。この結果から，苦手であった身近な動植物でも，触ったり抱いたりすることで興味を持てるようになったことが考えられる。

表8. 身近なものを大切にするようになった（ねらい）

身近なものを大切にするようになった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	2	2.0	2.0	2.0
	3	20	20.4	20.4	22.4
	4	48	49.0	49.0	71.4
	5	28	28.6	28.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『身近なものを大切にするようになった』について，「やや当てはまる」が 49%，「やや当てはまる」が 28.6%であった。この結果から，身近なものを大切にすることの意味を知ることができたと考えられる。

表9. 生活に関係の深い情報や施設などに関心や興味をもつようになった（ねらい）

身近なものを大切にするようになった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	2	2.0	2.0	2.0
	3	20	20.4	20.4	22.4
	4	48	49.0	49.0	71.4
	5	28	28.6	28.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『生活に関係の深い情報や施設などに関心や興味をもつようになった』について，「やや当てはまる」が 49%，「当てはまる」が 28.6%であった。この結果から，生活に関係する情報はパソコンや携帯電話を通して得ているとは思うが，周辺にある施設が保育との関わりが深いことを知らなかったことが考えられる。

表 10. 野菜や花の栽培や自然観察を通し，実践力が身に付いた（ねらい）

生活に関係の深い情報や施設などに関心や興味を持つようになった					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	9	9.2	9.2	9.2
	3	30	30.6	30.6	39.8
	4	40	40.8	40.8	80.6
	5	19	19.4	19.4	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『野菜や花の栽培や自然観察を通し，実践力が身に付いた』について，「やや当てはまる」が 40.8%，「当てはまる」が 19.4%であった。この結果から，野菜や花の栽培方法を習得できたことで，計画などを実現しようとする実行力や行動力が身に付いたと考えられる。

表 11. 子どもにとって望ましい環境構成が理解できた（ねらい）

子どもにとって望ましい環境構成ができた					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2	1	1.0	1.0	1.0
	3	16	16.3	16.3	17.3
	4	52	53.1	53.1	70.4
	5	29	29.6	29.6	100.0
	合計	98	100.0	100.0	

『子どもにとって望ましい環境構成が理解できた』について，「やや当てはまる」が 53.1%，「当てはまる」が 29.6%であった。この結果から保育をする上で子どもが健やかに生活できる環境を知ることができたと考えられる。

7. 授業内容のねらいの理解度と今後の課題

このような授業形態は，本学幼児教育学科発足してから長い。しかし，時代とともに学生の生活体験や興味関心の度合い，また要領・指針の改定などによる環境の授業を考えるにあたり，より実践的に進めることにより学生の学びが深まり，実践戦力を身につけることができるのではないかと考え，現在の方法にした。特にグループ決めを一方的に行っていたが，クラスのゼミをグループの単位にしたことで活動を通し互いに協力すること，責任を持つこと，意見を述べること，傾聴すること等がより結びつきを深めよりよい学びになった。また，園児と苗挿しや芋ほり体験を通し，園児とかかわる実践体験を通して保育者としてのかかわり方を具体的に学ぶことを盛り込んでいる。おおむね意図することは伝わり，体験で積極的に取り組んでいる様子が結果に示されていると考えられる。しかし，講義と実践の２本仕立てで行っていることで，移動時間や作業の手順が悪く予想以上に作業にとられ，講義時間が少なくなるなど授業内容が希薄になることがあり，次回に持ち越すこともあった。保育内容環境は広義にわる内容であり，他の保育内容との関連性もあり，より深い学びが必要と考える。今後この結果をもとに，授業内容を考える必要がある。毎回作業と講義で行っていたが，講義をまとめ作業の簡素化を図ることの必要性も考えられる。移動は実習前の体力作りを意識して階段を使用しているが，作業後は時間短縮することも課題の１つである。また，作業によっては着替えなしにするなど見直すべき点が多々あると考えられる。環境を通しての保育・教育が大事といわれる今日であるからこそ，実践を通しての学び，学生同士のかかわり，園児とのかかわり，そして環境を整え，さらに学びが深まることも課題である。

8. 学生の自由記述の結果

(同じ内容の自由記述をまとめたグラフ　図 1. 図 2)

(1)　この授業を受けて良かったところ

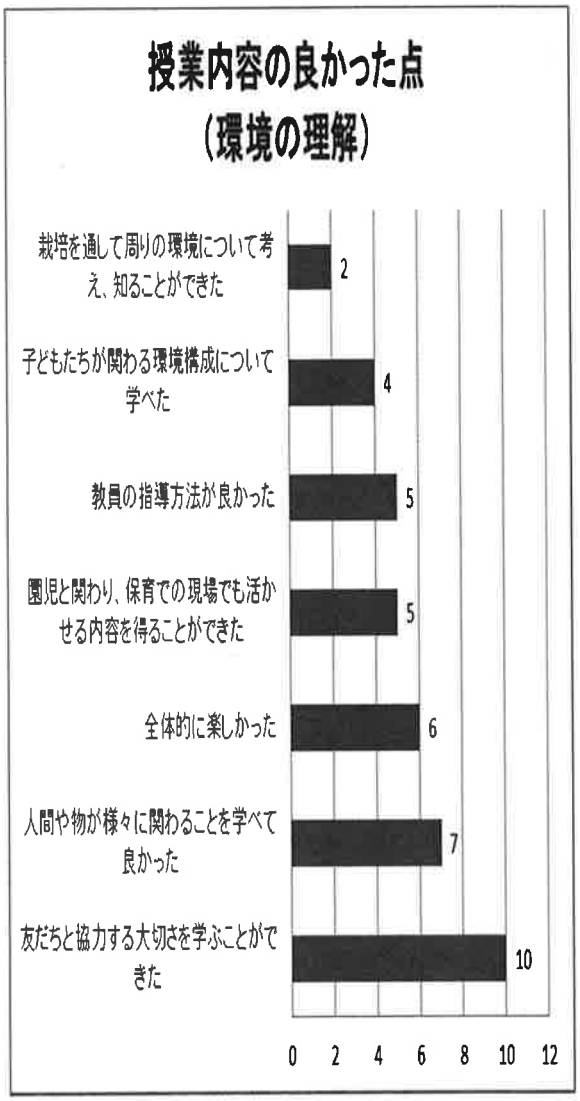

図 1. 授業内容の良かった点
環境の理解度

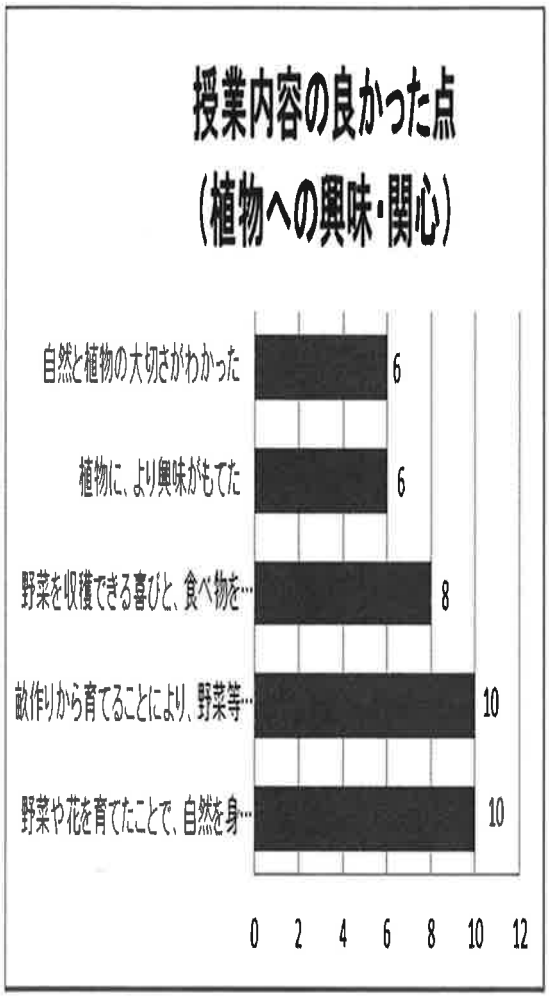

図 2. 授業内容の良かった点
植物への興味・関心

(2) 学生の気づきについて（参考資料として本文のまま記載する）

・農家の方がどれだけ手をかけて，お仕事されているかを学ぶことができ，感謝の気持ちが大きくなったところ。
・自分で育てた野菜が収穫できる喜びと，食べ物を大切にするという気持ちを得ることができた。
・野菜や花を育てて，心がきれいになった。
・本格的に野菜を育てたことで身近に感じた。
・花や野菜の栽培を通して，自然について関心が持てるようになった。
・野菜でも１つ１つによって育て方が違うことを知れた。
・花や野菜，虫に触れられて良かった。
・野菜と花のノートがあったので成長が身近に感じられた。
・野菜や花によって支える棒の長さや日当たり具合などが知れた。
・植物を育てることにより，野菜を育てる大切さを知り，野菜を残さなくなった。
・身近な野菜を育てることで，育てることの楽しさを味わうことができた。
・実際に野菜や花を育てることで野菜作りの大切さを理解することができた。
・自然と植物の大切さがわかった。
・栽培することの難しさや喜びを知った。
・特になし

(3) この授業を受けて悪かったところ（参考資料として本文のまま記載する）

・ノートを書く時間がほしかった。
・ノートの書き方がどのように書くと良いかわからなかった。
・座学でのプリントがなくまとめることが難しかった。
・ノートをつくる時の感想などを書くのが難しかった。
・観察ノートが意外と大変だった。
・途中から花の変化がなくて書くことがなくなった。
・最初の栽培ノートの説明がほしかった。
・ノート提出が大変だった。
・暑くて体力を使った。
・暑かった。
・外へ行き作業する時暑かった。
・日焼けをする。
・水分の飲むタイミングがない。
・階段がしんどかった。
・着替えがあって大変。
・畑への移動が大変だった。
・枯れたら悲しかった。
・水やりをやっていない時があった。
・夏の草取りはやめてほしい。
・荷物が多い。
・畑からの帰りにエレベーターが使えない事。
・体力的な面で辛い。
・腐ってしまった（野菜）
・係が水やりをしない。
・野菜のことしか印象にない。
・芋のつるはどうなったのか。
・芋畑が遠すぎる。
・虫刺されがひどかった。

・水やりを忘れた。(本人の反省)
・キュウリの苗が腐った。(本人の反省)
・時間が延長しやすかった。
・時間がいつもギリギリ。
・次の授業へ行くのに時間がギリギリになることが多くあった。
・授業の延長(着替えもあったため，次の授業へ遅れてしまう子がいた)
・ありません。
・特になし。

9. 演習(作業)の授業評価の結果と考察

学生の気づきとして，環境の理解より「友達と協力することの大切さが学ぶことができた。」が多く，次いで「人間や物が様々にかかわることを学べてよかった。」などが多く，授業で学び取ってほしい点「園児と関わり保育での職場でも生かせる内容を得ることができた。」「教員の指導方がよかった」「子どもたちが関わる環境構成ににについて学べた」「栽培を通して周りの環境について考え，知ることができた。」に対しての記述が少ない結果となっていた。

学生にとって直接的に関わる体験が大きく占め，特に人的環境，物的環境の大切さを知ることができ，環境の授業の実践的学びができたことが理解できた。また，(植物への興味・関心)では，野菜や花を育てたことで，自然を身近に感じられるようになった」「畝作りから育てることにより，野菜等について興味・関心が高まった。」「野菜を収穫できる喜びと，食べ物を大切にするきもちをもてた」といった結果から，近年の子どもに必要な自然とのかかわりや，食育を伝える立場の学生にとって好ましい授業であることが考えられる。この授業を受けて悪かったところでは観察ノートに対して，得意な学生と苦手な学生との差が出ていたことが示された。特に書き方や，記述法等を具体的に伝えたにもかかわらず，伝わらない学生に対し，中間時点で個別指導が必要であることが考えられる。また授業が初夏に向かう時期ということもあり作業への関心よりも暑さ，体力的な部分が気になった点があげられた。学びや気づきなど好意的に感じることで，より吸収できることを考えることが目的であるこの環境の授業内容として，まず1つ目に，子どもの成長発達にとってどのような環境が良いのか。2つ目に，子どもを取りまく身近な環境(自然・社会・遊び・文化)などについて理解することが望ましい。3つ目に，環境の構成について，基礎に置いた学修内容や演習では，体験学習として，野菜や花の栽培，自然観察などの具体的な体験を通し「環境」を理解し，生命の大切さ尊さに気づき，保育者として幼児に伝える方法を身につけさせることである。この授業内容を通して，専門的知識や技能を習得し，それぞれの現場で協調性をもって柔軟に活用できることを目標として行っている点が実証されたと考えられる。

10. 結論

人間関係・物的関係の関わりから，「環境」という言葉の意味は，一般的には地球環境，自然環境，社会環境，などを思い浮かべることができる。保育において「環境」の持つ意味を考えると，幼稚園教育要領では「第1章　総則／第1　幼稚園教育の基本幼児期の教育は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，幼稚園教育は，学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため，幼児期の特性を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とする。／このため教師は，幼児との信頼関係を十分に築き，幼児が身近な環境に主体的に関わり，環境とのかかわり方や意味に気付き，これらを取り込もうとして，試行錯誤したり，考えたりするようになる幼児期の教育における見方，考え方を生かし，幼児とともによりよい教育環境を創造するように努めるものとする。[4)]」保育所保育指針では「第1章総則　／1保育所保育に関する基本原則／(1)保育所の役割　／イ保育所はその目的を達成するために，保育所に関する専門性を有する職員が，家庭との緊密な連携の下に，子どもの状況や発達過程を踏まえ，保育所における環境を通して，養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。／(2)保育の目標　(ア)「十分に養護が行き届いた環境の下に，くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし，生命の保持及び情緒の安定を図ること。／(3)保育の方法　／イ子どもの生活リズムを大切にし，健康，安全で情緒の安定した生活ができる環境や，自己を十分に発揮できる環境を整えること。／オ　子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し，子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に，乳幼児期にふさわし

い体験が得られるように，生活や遊びを通して総合的に保育すること。／（4）保育の環境／　保育の環境には，保育士等や子どもなどの人的環境，施設や遊具などの物的環境，更には自然や社会の事象などがある。保育所はこうした人，物，場などの環境が相互に関連し合い，子どもの生活が豊かになるよう，次の事項に留意しつつ，計画的に環境を構成し，工夫して保育をしなければならない。／ア子ども自らが環境に関わり，自発的に活動し，様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。／イ子どもの活動が豊かに展開されるよう，保育所の設備や環境を整え，保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。／ウ保育室は，温かな親しみとくつろぎの場となるとともに，生き生きとした活動ができる場となるように配慮すること。／エ子どもが人と関わる力を育てていくため，子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。[2)]」幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては，「第1章総則／第1　幼保連携型認定こども園における教育保育の基本及び目的等／1幼保連携型認定こども園における教育保育の基本／乳幼児期の教育及び保育は，子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，幼保連携型認定こども園における教育及び保育は，就学前の子どもに関する教育，保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成18年法律第77号。以下「認定こども園法」という。）第2条第7項に規定する目的及び第9条に掲げる目標を達成するため，乳幼児期全体を通して，その特性および保護者や地域の実態を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とし，家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない。／このため保育教諭等は，園児との信頼関係を十分に築き，園児らが安心して身近な環境に主体的に関わり，環境とのかかわり方や意味に気付き，これらを取り込もうとし，試行錯誤したり，考えたりするようになる気用意教育時期の教育における見方・考え方を活かし，その活動が豊かに展開されるように環境を整え園児とともによりよい教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ，次に示す事項を重視して教育及び保育を行わなければならない。／（4）乳幼児期のおける発達は，心身の諸側面が相互に関連し合い，多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること，また，園児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮してとして，園児一人ひとりの特性や発達の過程に応じ，発達の課題に即した指導を行うようにすること。／その際，保育教諭等は，園児の主体的な活動が確保されるよう，園児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき，計画的環境を構成しなければならない。この場合において，保育教諭等は，園児の人やものとの関わりが重要であることを踏まえ，教材を工夫し，物的，交換的環境を構成しなければならない。[2)]」それぞれの要領，指針，教育・保育要領等の総則の中において「環境」という言葉が数多く使用され，環境による教育・保育を行う重要性が示されている。

生活体験の少ない学生に対して具体的活動体験を通して，学生自ら体験することで何を伝えることが必要か，また，その中での体験することで感性が豊かになる，人とのかかわりなどに気付くことで，乳幼児に対して「環境」を通して保育や教育の重要性を伝える方法は友好的な手段であったことがいえる。実際に子どもと一緒に体験する中で子どもとの関わりや，学生同士の協力することの重要性など，保育者になった時に，子どもにどう伝えるべきか考えるきっかけとなった。特に，グループワークではチームで働く体験を通し互いに信頼関係を持つために，コミュニケーションの必要性や協力するということを学び，それをきっかけとして子どもにとっての「人的環境」の重要性を考えるようにした。

学生が芋の苗差しを園児と行う時には保育者として子どもに寄り添うためにどのようなことを注意して関わればよいのかを考えるために「保育者は子どもにとって園でのお母さんであり信頼できる人・安心できる人として，子どもがまわりの環境に興味関心をもって関わり，意欲・豊かな心情の育ちにつながる働きをする」ことを理解するようにした。学生は子どもにとってまわりの様々な意味をもたらす環境とつなげる役割を果たす保育者は人的環境であるということを意識し，子どもにとって母の役割の保育者となるのは学生自身であることが自覚できるように結び付けていった。人的環境としての保育者は受容者・共感者・遊びの提供者・遊び仲間・助ける人・諭す人になる必要があり，子どもが「人，物，事」に関わることを支え，自立心・探求心・意欲を育むために何役もの役割を果たすことで保育の内容を支える専門家としての最大の人的環境となること

に結び付けていくように勧めていったことで，実際のときには保育者としての自覚をもって子どもと接することができ，人的環境を意識することにつながった。その後の学修では，愛着や信頼関係の積み重ねが主体性につながることや各年齢による保育者の関わりが適切に行われることで，子どもにとって保育者は心のよりどころとなり，保育者を心の基地として様々な経験を重ね，興味をさまざまに広げ，小さな積み重ねをすることで自信を持ち，主体性を獲得していくことになっていく。その中で，人の気持ちを受け止めながらうれしい思いや楽しさを波紋が広がるようにクラスに伝えることや，クラスの仲間として心をつなぐように働きかけ，一人ひとりの良さを友達に伝わるようまた，友達と一緒にいる心地よさ・友達の良さが感じられるように働きかけることができる保育者を意識できるように進めてきた。

学生は子どもが主体性をもって物事にかかわっていく基盤となることを理解し，人的環境としての保育者の働きを十分理解することにつなげていくことができたと考える。保育者は子どもにとって一番大きな人的環境となると同時に物的環境も考える必要がある。保育者を目指す学生は，その意味を十分理解する必要がある。それは，子どもの心を引き付ける保育者として必要な物的環境として，遊びの知識，技術，知恵，言葉等，子どもたちの思いを満たすためのポケットが必要であり子どもの成長や発達，一人ひとりの興味関心の持ち方によって何を引き出して関わるのかを決めていくことができるように学習できるような働きかけが重要である。思いをつなげる保育者として，幼児期の教育が環境による教育であり，様々な捉え方を教える必要がある。保育者は子どもにとって楽しいものを考え，子どもの心情や興味関心を捉え，友達・者・出来事をつなげて保育内容を考えていくことになる。保育者は教材・保育空間・友達との関係づくりの援助を行う。そのため意図的な関わりが必要であり，そのための教材として何が必要であるのか，どのタイミングで行うのかを意識し働きかける。等物的環境としての物，場，時間の関係性を意識し活用していくことが保育にとって重要なことであることを意識することが必要である。単に物的環境として学生は単一的に考え，関連性があることに気付くことが少なくない。保育者の働きとして，関係性を意識し繋げていく働きが求められることを理解出来るような学修を考えることが必要である。

今後の課題としては，生活環境が大きく変化している中その中で成長している学生は，生活経験が乏しく自然に対しての関心度も偏りがある。環境の授業の中で学生は「いやー。虫なんか触れない」「気持ち悪い」「私日光アレルギーだから外に出たくない」「これどうやって使うの」等，生活経験が少なくなってきている。しかし，「花，野菜を育てる」といった体験授業を通して得られる効果としては，保育者として必要な要素を多く含んでいる。作業するために着替えを素早く行う。必要なものを準備する。観察結果をまとめ，掲示や子どもに伝えるために意識し表現する。収穫出来た野菜を使い調理することや，人と協力することで職場でのチームワークにつながる等スキルアップが望まれる。しかし，その効果は学生の生活経験不足が多くみられるようになると難しくなることであろう。戸外での作業は天候に左右される。また，暑さのために学生のモチベーションに大きく影響し作業が進まないこともある。多くの学生は自然の事象や草花に対して興味関心が薄く花が咲いていても，雲を見て想像するなど自然に対して心動かす事が少ない。「環境を通した教育・保育」は重要なことである。生活経験が少なくなった学生ではあるが，少ないからこそ今ある自然を最大限に活用し，未来を担う子どもたちに対して，その育ちにふさわしい人的環境としての専門性を持った保育者となるように知識とそれを活用できる知恵を身に付けていくような総合学修を考えていくことが重要である。理論を踏まえ実践を通し，基本的な知識や技術を使い，学修した5つの領域を総合的に判断し関連活動を提供する必要もある。子どもの心情を理解し，豊かさを保障するために，どのように関わるのか，自ら考え，判断し行動することができる保育者となるように今後も学生と向き合い共に学ぶ面白さ，問題意識を持ち進めていくようにしたい。

引用文献

1) 文部科学省学校教育法第22条　文部科学省　新学校教育法
http:/www.mext.go.jp 平成30年5月7日アクセス
2) 厚生労働省：『保育所保育指針解説』，初版第1，362.(2018)
3) 文部科学省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　幼稚園教育要領，平成29年3月31日文部科

学省告示第 62 号，27.（2017）
4）文部科学省：『幼稚園教育要領解説』，初版第 1，26
282（2018）

参考文献

1）秋田喜代美　増田時枝　安見克夫：『新時代の保育双書保育内容「環境」』第 3 版編　（株）みらい，20－31　42－83　（2019）
2）小田豊　湯川秀樹：『新保育ライブラリ　保育の内容・方法を知る　保育内容　環境　』，北大路書房，95－106（2009）
3）柴田和恵　前田明子　大野和美（ほか）：成人看護学看護過程演習の評価 - 自己評価による学習到達度と授業評価アンケートより -，大使大
学紀要 Vol.11　29－36　（2011）
4）飛内文代　高坂智　久保田千夏：生徒の視点を生かした授業評価についての研究 - 高等学校における授業改善への活用の可能性 -，青森県総合学校教育センター平成 15 年度研究紀要　5－61（2003）
5）文部科学省：『幼稚園教育要領解説』，初版第 1，167－212.（2018）
6）厚生労働省：『保育所保育指針解説』，初版第 1，204－247.（2018）